

第一章 常樂宗教の提唱
六

ただの表情一つが起こす喜びの念でさえも、人類がこれにたえず放散するように努めて生活するとき、全世界はこんなにも光明化されるのであるから、もつと崇高偉大な種類の喜びを掻き立てることにするならば、世界がどんなに光明化され、歡喜化されてくるかしのれないのである。

われわれが全世界に善き表情を与えたならば、世界もわれわれに善き表情を与えてくれるのである。こちらが微笑みかけるならば、相手も微笑みかけてくれるのである。こちらが苦い顔をすれば相手も苦い顔をするのである。ではわれわれは最も豊富な美しい愛の感情をこの世界に与えることにしたならば、全世界がサブライムな美しい愛の感情で満たされることになるのである。いやしくもわれらがこの世界に生を享けているならば、まずわれわれは「何をわれらがこの世界に与えようか」ということを考えなければならぬ。それは苦を与うべきであるか、樂を与うべきであるか。今までのある宗教で人間の苦しむことが神の喜びであるというような信仰をもっている人たちは、神の喜びのために人類を苦しめてやろうと思つたかもしれないが、われわれ「生長の家」家族は人類に樂を与え喜びを与えることが神の喜びであるとするので

ある。

第六章 「維摩經」および「涅槃經」に現れたる「肉体無」
三

たとい無量百千億の魔も如来の身血を侵し出すこと能わず。故は如何ん。如来の身は血肉。筋脈、骨髓に非ず。如来は真実にして実に悩壞なし。(『大般涅槃經』月喩品)

この仏性こそ「我」というものの本当の意味である。そのほかに「我」はない。今わたしは涅槃に入るに当たって、今こそ始めて衆生諸々の覺宝藏、悟りの宝の藏——実相の所在地を示すのである、これこそ仏性であると釈迦はお説きになったのであります。この真理が解つたならば、須臾にして變滅する「我」というものが「本当の我」ではなくて金剛不壞の仏性こそ「我」であるとわかりますから、「一切衆生この事を見已らば、心歡喜を生じて如来を歸仰す」実に嬉しくて嬉しくてならないようになって、神様ありがとう、仏様ありがとうと絶叫せずにはおられなくなるのであります。そして、金剛不壞の如来我こそ我でありますから、「たとい無量百千億の魔も如来の身血を侵し出すことはできない。如来の身は血肉、筋脈、骨髓にあらず、如来は真実にして実に悩みも破壞もない」というのは、あの聖經『甘露の法雨』の中にある聖句「人間は物質に非ず、肉体に非ず、脳髓細胞に非ず、神經細胞に非ず、血球に非ず、血清に非ず云々」とあるのと同じ

であります。われわれの肉体、血液とか細胞とか筋脈骨髄とかいうものは、本当の実在じゃないのであって、波動が「縁」というラジオのセットにかかって、そこに形を表現しているところの仮有なのです。実相は金剛不壊であって、これは百千無量億万の魔も如来の身血を侵し出すこと能わずで、どんな悪魔もわれわれに喰い着いて、害を与えることはできない、金剛不壊の存在である。この金剛不壊の存在が自分自身であるということが、『涅槃経』に説いてあるわけであります。これが仏教の神髄で、「生長の家」の縦の真理になっっているであります。このことは仏教の独占でもなく、やはりイエス・キリストも説いているのであります。すべて宗教的真理には独占というものはないのであります。独占であつたら、他には通用しない、したがって真理でないということになりません。で、「ヨハネ伝」にはちゃんと「なんじ未だ五十歳にもならぬにアブラハムを見しか」とユダヤ人が尋ねましたときにイエスがどう言っているかといいますと「まことに誠に汝らに告ぐ、アブラハムの生まれいでぬ前より我はあるなり」といって、無限の昔から生きとおしているところの自分が「本当の自分」であるということを説いているのであります。肉体は決して自分の実相ではない、肉体は本来無にしてただ心の波が「縁」というラジオ・セットにふれて、そこに形を現わしているだけで、肉体に現われる病氣不幸等の状態は、心の波動相應の形を縁に触れて顕現する。だから心の波の相を変えれば肉体の健全不健全は変化してくるのであります。これが「生長の家」の横の真理であります。

第七章

十三 万教ただ一つのいのちの流れ

今でも『生命の實相』を読んで病氣が治る事実を、「神が癒し給うのだ」と、考えている人があるかも知れぬが、神が治すのではなく、読めば心の眼が開けて、すでに最初から健康であつた自分の「実相」を見出すのである。病氣だと見えたのは人間の仮相でしかなかったからである。もし病氣が実際にあつて神が病氣を治し給うのであつたならば、なんらかの事情で、神が治し給わない場合は、全能の神ならば治せば治しうるものを治さないのであるから、その治さないことに神意があるので、これはかつての「ひとのみち」の教えのように「神のみいらせ」と見なければならぬのである。しかし、それは「生長の家」の思想ではない。「神のみいらせ」の思想のうちには「現象宇宙の実在」を肯定する思想と「神そのものうちに聖暗とでも言うべきなんらかの暗黒を内包している」という思想を含んでいるのである。倉田百三氏は、宇宙の太源にまかせきりになるといふ心境にいながら、なお、宇宙の太源の中にはなおこの聖暗を内包しているといふ思想以上について行けないと言われたのは、ホルムズまたは「ひとのみち」と同じ思想的位置にいられるのである。倉田氏が天理教に共鳴せられるのも「宇宙の太源の中には聖暗を含んでいる」といふ真如縁起的な思想的立場にいられるからである。しかし、よいか悪いか、その批判は読者に任せるとして、

わたしは「真如縁起」も「みしらせ」も、神の「病治し」も、「病こしらえ」も、聖暗も、寂光も跳び超えてしまったのである。そして病本来なし、不幸本来なし、聖暗本来なし、寂光本来なしの世界へ入ってしまったのである。その消息はわたしの『神を見る迄』の巻末数十ページに記載してあるから詳しくは繰り返さないが、簡単にいえばわたしはこう書いている——「私はついに神を見出し、本当の自分を見出したのであった。三界は唯心の所現である、その心をも、また現するところの現象をも、一切空無と截ち切つて、その空無を縦に貫く久遠不滅の大生命が自分であった。……」と。わたしはついに「久遠を流るるいのち」に触れたのであった。それはもう病気の無い世界であった。

真如縁起か阿頼耶縁起か——どちらが本当であるかは仏教界では教界上の大問題である。一心のうちに十界を互具しており、一念のうちに三千の世界があるという、その「一心」とは、その「一念」とは真如心性であるか、阿頼耶識であるかは問題であるのである。これは（一）仏でも迷う要素を持っているか、（二）迷った凡夫でも仏になるか、（三）仏は未だかつて一度も迷わないか、の重大問題であるのである。わたしは（一）を完全に否定してしまい、（二）は現象仏としてその仮存在をみとめ、（三）を完全に肯定して、「衆生本来仏にして、仏は未だかつて迷わず」と断定してしまったのである。かくて「いっさいの人間は仏にして未だかつて迷いしことなし！ 迷えるで見える五官の我は本来無いのだ！」まことにも、釈迦が悟りを開いたとき「有情非情同時成仏、草木山川国土一切成道」と知ったのもそういう心境ではなかった

かと、類推できるのである。この悟りの目で『古事記』を読んだとき、仏典を読んだとき、聖書を読んだとき、悉く別の力で照らし出された万教歸一の真理がおのずから見出された。諸教はわたしにとつてはその夾雑物を除いたとき、いずれもただ一つ、「久遠を流るるいのち」の表現であった。すべての宗教はこの「久遠を流るるいのち」によって互いに手を繋ぎ合わすべきものではないだろうか。救われるのは宗教の儀礼によってではない、ただこの「久遠を流るるいのち」によってである。いのち！いのち！わたしはいのちの衝動を感じて『生長の家』を、『生命の實相』を書きはじめたのであった。これの本当の著者は「久遠を流るるいのち」である。そして「生長の家」を創めたのは「久遠を流るるいのち」であったのだ。

第八章 われらの祈願および修養 神の子の生活を今生きよ

われらは自己を神の子（または仏子）なりと信じ、常にけだかく人生の道を歩み、内なる魂の矜恃を傷つけざらんことを期す。

さて、この自分は神の子であるということがわかりましたならば、そのわかった神の子を今生きて行くということが必要なであります。「自分は神の子である」とわかりながらそれを今生きて行かないというのは、これは実に矛盾したこと

であります。そういう人は実際は、本当に神の子であるとかかっていないのであります。そういう人が神の子であると思うのは、偽存在にせものの自分を神の子であると思っている場合にそうなるのであります。偽存在にせものの自分、我が働きが神の子であるところ思っている、その場合には、いくら聖典を読んでも実際に神の子らしき行ないとしてそこに現われてこないのではありません。偽存在にせものの自分をいくら磨いても本物になるわけではないのであります。真鍮しんちゆうの指輪をもつてきて、磨いたら黄金になるであろうと思つていくら磨いたつて、真鍮しんちゆうはやはり真鍮しんちゆうなのであります。それと同じく、この偽存在にせものの自分をもつて「神の子である、神の子である」ところ思つても、なかなかわれわれは神の子になれつこはない。それでわれわれは神の子であるという自覚を実相から出してくるということが必要であります。

よく病気の方などで、あんた『生命の實相』をよく読んでおられますかというところ、よく読んでいます、朝から晩まで『生命の實相』ばかり読んでそうして疲れてしまつて何もできません（笑声）とこういう人があります。こういう人は『生命の實相』の真理をどこへ滲しみ込ませようとしているのであるかというところ、偽存在にせものの自分の中に滲しみ込ませようとしているのであります。だから何か金粉のようなものを付け加えて磨いておいたらしまいは金になるであろう、こういうふうにして朝から晩まで真鍮しんちゆうを磨いている方である。それじゃいけないのであります。それでわれわれは神の子であると知るといふことは、結局は神の子を生きたるということ、**「知る」**ということと**「生きる」**ということと別にあると思つてまち

がいであります。つまり、「知る」とは「生きる」ということである。親鸞聖人が「信心よろこぶその人を如来とひとしときたまう。大信心は仏性なり。仏性すなわち如来なり」といふことを『弥陀和讃』の中で説いておられる。という意味は、信心を起す心、この本当の信心というものは、如来と同じものであるということである。では、如来はどういう働きをしたかというところ、一切衆生を生かさんがために、いろいろ無限の愛をもつて超ちゆう載さい劫きやうの永えいい間ま行ぎやうをして、今西方さいほうに安楽国という浄土を建設して、そうしてそこに、わたしを頼む一切衆生という衆生ことごとく救わぬことはないといふふうな、大きな、人を救おうという利他的な念願で働きをしておられるのであります。その仏の働きが自分の中に出てきたらこれが信心である。信心というのはただ南無阿弥陀仏と一口先にいって、「偽存在にせものの肉体の自分」が蓄音機のレコードみたいに「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」といいながら、行の上で嫁いじめをしているといふふうなことではこれは信心ではない。信心とは仏の心が自分の中に生きることである。金光教祖は、「日に日に生くるが信心なり」ところいわれた。日に日に生くるが信心なり——そうしますと、この南無阿弥陀仏というのは何であるかというところ、「南無」といふのは宿命きみよゆうである、弥陀の命に歸き一いつするということ、阿弥陀様の生命いのちのままに生きましようといふのが南無阿弥陀仏であります。ところが、阿弥陀様の生命のままに生きましようといふと口に唱えて、その——阿弥陀様は慈悲の権化ごんげであるのに、その阿弥陀様の生命のままに生きましようといふながら、嫁をいじめてみたり、欲ばつて泥棒してみたり、無理なことをして儲けて

みたり、「このくらいのことはよいだろうから、ちょっとだけ狷いことをしよう」とそういうふうなことを考えているようなことでは、「阿弥陀様の生命のままに生きましょう」といういながら、阿弥陀様に背を向けている、どこにも阿弥陀さまに帰命きみやうしてはいない。これではその人は信心じゃないのであります。本当の信心というのは「ここに神が生きる」「ここに仏が生きる」この自覚で生きるのが信心であります。今まで仏様というものをまちがって解釈して、なんでも涅槃寂靜であって、力のない、空のなんにもないようなものである、とこういうふうな考え、なんの力なく、死んだように、空になったように遁世とんせいしてしまう。これが仏様の命令のままに生きるのだと考えたらまちがいです。仏様は無礙自在の働きをして、少しも休む暇もなく働いていられるのであります。人のために休み暇もなく働いてやまない、これが仏様の心をわが心とし、仏様に帰命することあります。この世、現世は無常であって、本来ない空であると仏典はいう。そして仏様も空である、みんな空であるからどうでもよいのだと、したいままをして、結局空に帰して、それで一生涯であるというふうな考え方を、この世をつまらなく否定してしまうことを本当に仏道を生きることだと思っっている、それはまちがいです。現代の仏教が本当の教祖たる釈迦の御教えから外れてしまっただけの現世は無常である。空々漠々くうくうぼくぼくである、仏様も空である、みんな空であって、その空から阿弥陀如来というものが現われて、そうして西方極楽浄土に報土を作って、この南無阿弥陀仏と口の先だけで称となえておいたら、死んでからそういう極楽浄土で楽を

さしてもらおうのだというふうな、そんな馬鹿な考えをもっている似而非えせ仏教信者があるために、せっかくの尊い釈迦の教えが死んでしまい現実を生かさないという残念なことになっているのであります。この釈尊の御教えを本当に生かし、同時にすべての善き宗教の教祖の御教えの神髓しんずいを生かすのが生長の家であります。本当の信心は、今自分が仏子であり、神の子であるということを知る、そうして、今自分がその仏なり神の子なりを生きることであります。

「日に日に生くるが信心なり」を本当に知ったならば今生きることであります。仏様は衆生を救わんがために千変万化していられることを知ったら、自分もそのとおりに生きることです。これが本当の信心なのであります。たとえばわれわれが百万長者であるということを知ったならば、その百万円の金をじっとさしておくはずがないのであります。あれも買いたい、これも買いたい、あの人にもちょっとやって喜ばせてやりたい、こういう事業も起こしたいと、これは本当に百万円を持つたということを知った人のことです。だけれども百万円親が遺産として残しておいてくれても、そいつを見つけない間は、百万円持っていてもうそういう働きが起ってこないのです。ところが、われわれが本当に百万円を持っているということを知ったら、そこに百万円の活動が始まってくる。知るということとは活動することである。われわれが仏の子であり、神の子であるということを知ったならば、その仏を生活に生き、神を生活に生きるということになってこなければならぬのです。それを生活に移さないとまだ本当に知らないということ。だからわれわれは仏の心を行動に移す

ということによってはじめて仏をここに実現したということになるのです。仏は法のりである、法は「宜のり」であり「述のべる」であり、コトバである。また聖書のいうとおり、神もコトバである。コトバとは何であるかというと震動である。震動とは何であるかという活動である。活動が神であり、仏である。仏は涅槃寂静で、空で何にもない——そんなことじゃないのです。活動が仏である。法蔵菩薩は活動せられて極楽浄土を建立せられた、今もまだ働き給うのです。仏の本願とは、仏の活動です。仏とはほゞけることで、縛しばりがなくなつて自由自在になることであつて、無擬自在な働きができなくては、これは仏ではない、神ではないということになるのであります。だから今、皆さんが神の子であるという実相を「生長の家」によつて知らしていただいたならば、ただちに、即刻、今日から、今から、この瞬間から「神の子」を活動させる、愛によつて隣人に働きかけてこれを光明化し救うということが必要なのであります。

いっさいのものを捧め

われらは野を、野の花を、み空を、み空の星を、蒼海あおうみを、大地を、火を、水を、いっさいの大自然と生物とを觀るに、その背後に神の生命の円相を觀、その生命を敬けいし、礼らいし、愛し、いやしくも浪費せざらんことを期す。

そこで、自分自身が神の子であると自覚した時に、次いでこの神の自覚が発動し動き出した場合に神の子が活動する環境はどういう世界であるかという、これは第一カ条のここ

ろでいったとおり、無限創造の宇宙すなわち「生長の家」であります。仏教でいうと寂光土じやくこうどである。寂光土というところと平和すぎるので、活気潑刺はつせきたる「生長の家」すなわち無限創造の宇宙だとわれわれはいうのですが、この無限創造の宇宙たるやどういふものであるかという、聖經『甘露の法雨』の講義の時に申しましたように、それは無限次元の世界である。われわれの住んでいるこの三次元（縦・横・厚みの三つの広がり）の世界だけでもこんなに美しい世界であるのに、それが無限次元の妙なる世界である。その妙なる世界がこの五官にはその全体の貌すがたは見えないけれども、妙なる世界のうづしとし、写真として見える。（たとえば写真ですが、實際のわれわれ人間の相は写真に比べると、もっと複雑な相をし、もっと複雑な次元を備え、もっと複雑な色彩を備えているのであるけれども、写真にはただ一色の平面の姿に場っている。）それと同じに、われわれの五官で認識みとめる三次元の世界では実相の世界の複雑微妙な無限次元の妙なる美しい世界が平凡な世界に見えているのであります。けれどもわれわれはこの肉眼で見るところの野を、野の花や、み空の星や、蒼海や、大地や、火や、水や、いっさいの大自然や、生物や、いっさいの現象を見るのに、この第三次元の縦・横・厚みのこんな下らない、単純な、味のすくない世界とは見ないで、その奥の奥を觀て、実相を觀て、もっと無限に美しい円満な、完全な神の生命というものを觀る、そうしてそれを敬けいし、礼らいし、愛し、いやしくも浪費せざらんことを念願とするのが生長の家の生き方であります。

「生長の家」は、ここに明らかに生命礼拝の宗教でありま

すが、原始人の生命礼拝の宗教とはちがう。原始人は物の奥の奥にある実相などというものを知らない。だから生命礼拝といっても浅薄な現象生命の礼拝であったので、現象そのものを不思議がって礼拝していたのであります。この現象の奥の実相を観て礼拝することを教えたのはまず『法華経』であります。生長の家と仏教とは根本において少しもちがってはおりませんけれども、現在世人が普通に考えられている仏教というものとはややちがうのであります。というのは、釈迦の説き方がわるいのではない、釈迦の説き方を理解することができなかった後の祖述者が教祖の正説を完全に伝えなかつたというわけであります。仏教では「色即是空」——物質は空である、こういふぐあいというのであります。「生長の家」でも物質は本来空であるというのであります。「生長の家」ではもう一つ「空」を超えた存在に「実」というのを付けているのであります。仏教でもむろん「実相」という言葉は使っておりますけれどもそいつが時々誤られまして、「実相はすなわち空なり」というぐあいに説いている人が多いのであります。実相を空であるとする、そうすると、その「空」とはどんなものであるかという、空であるから、空気みたいで、エーテルみたいで形がない。形がないから、何も無いよ。うなものであるから金剛不壊である。たとえば空気はいくら斬っても斬れやしない。もう一つ空気よりも、手にも触れない、エーテルみたいなものになってしまふといよいよ斬ることができないものである、それであるから金剛不壊である。実相はエーテルみたいなものであるから自由自在であると、こう実相を空々漠々なものとある仏教家は考える。ところが

もしわれわれの実相というものがエーテルみたいなものであって、空々漠々のもので無色透明の、ちっとも美しいこともなんともない、そういうふうなものを実相であって、変化の姿、美しい姿というものは幻みたいな何も無いものであると、こういうふうに説くまちがった仏教者に従って「汝ら実相に還れ」という教えを生きることになったら、空になる、エーテルみたいになる、死んで超高熱度で焼かれて、透明なガス体になるのが、仏説に従うことになってしまふ。これではさしずめ三原山や浅間山の噴火口が賑うことになるのであります。これではいけないのであります。(つづく)

生命の實相 谷口雅春 日本教分社